

陳情番号	陳情第32号	受理日	令和4年12月6日
件名	用水路『大川』改修についての陳情		
陳情者	住所	西宮市上ヶ原三番町	
	氏名(団体名)	上ヶ原福社会(自治会) 会長 大西 恵二	

(陳情の趣旨)

江戸時代のはじめ、上ヶ原台地はススキの生える荒野でした。そこで、甲陽の大池と広田の新池を築造する代償に仁川の水利権を得て、その用水を上ヶ原用水路を通じ上ヶ原台地に導水することで、今日の様な緑豊かな上ヶ原台地することに成功しました。

上ヶ原用水路は、上ヶ原地区に入ると『大川』と名を変え、上ヶ原地区の高台(主に山手町と山田町の境目)を北から南まで貫く川幅約2メートルの幹線用水路となります。そして大川から12本の枝川が分岐し、上ヶ原台地全体に用水が行き渡るようになっています。

上ヶ原の開村当時からのこの大川は農業用給水路として設置されたため、普段は可能流量の十分の一位しか流れていません。(農業用水量はこれで十分です)そして給水路であるため、下流に行くほど狭くなっています。

ところで、この大川の集水(雨水流入)域は、以前は山林や原野で貯水能力がありましたが、近年は阪神・神戸浄水場、関西学院グランドや住宅地となり降雨があれば保水能力がないため即時にこの大川に流れ込みます。そのため、近年、大川は排水路としても重要な役割を果たしています。

この大川は、西岸は山があるため心配ありませんが、東岸は堤防を兼ねた里道があり片天井川となっています。

ところが、最近、この大川の西側の山を切土する宅地開発が計画されています。西側の山を切土されると、大川は両天井川となってしまいます。

大川は、過去に2度、約50ミリ(1時間当たり)の大雨が降った時、越水したことがあります。幸い水路の決壊はありませんでしたが、一部の堤防が破損し大変危険な状況になりました。

阪神淡路大震災後、「50ミリ以上の降雨があれば危険だから」と当時の会長が市に相談しましたが、市は「もし50ミリ以上の降雨があれば、それはもう天災でどうしようもありません」という回答でした。

しかし、近年、地球温暖化のためか50ミリを越える降雨は各地で頻繁にあり、いつ上ヶ原地区にあっても不思議ではありません。

もし、50ミリを超える降雨があった場合、越水で済めばまだましですが、堤防や川床が流され決壊すれば、その水は土石流となり東側の上ヶ原山手町か西側の山田町の多くの住宅を押し流すこととなります。

また、用水路が決壊すれば、農業用水を通すことができず、営農ができなくなります。

田畑の多くあった時代は、大川が増水すれば、前述の12本の枝川に放流し、そして田畑へ導水し、田畑の保水力（田畑のダム化）を利用することができましたが、現在では住宅化しているため、それもできません。

このように、大川は以前は農業用給水路でしたが、現在では宅地等の雨水排水路としても重要な役目を果たしています。

大川は部分的に改修が繰り返されているため、つぎはぎだらけです。また、肝心の最下流部は川壁が石垣のところもあり、しかも、この隣接部に大規模住宅開発が計画されているため、大川は兩天井川となり、さらに危険度が増すこととなります。

さらに、杞憂かもしれませんが、川壁が脆弱なため、大きな地震があれば護岸の崩落も心配されます。

先日、市の方に現場を検分していただきましたが、豪雨時でなかったため、要望の趣旨が伝わりませんでした。

災害が起きてからでは手遅れになりますので、早急に措置を講じていただきますよう、以下の事項について要望いたします。

#### （陳情事項）

地域全体の保水力が低下し、なお豪雨が増えてきた昨今の状況に鑑み、災害防止の観点から「大川を一体成型の強固な川壁にする」「里道壁をコンクリート壁化し漏水の防止を図る」「水路を拡幅し里道の整備をする」など、現実的な対策について早急に検討し、可能なものから着手するよう市に求めること。